

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720173

研究課題名(和文)19世紀フランスの中等教育 規範の変遷と文学の生成

研究課題名(英文)French secondary education in 19th century - transition of the classic literature

研究代表者

畠山 達 (HATAKEYAMA, Toru)

日本大学・法学部・准教授

研究者番号：10600752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は規範の生成と文学との関係をさぐることにあった。主にフランス19世紀の詩人・批評家ボードレールを中心に学校教育と文学、さらには文学作品の受容とその規範化という側面に注目し多くの研究成果を残すことができた。

4年の任期の間に学会等における口頭発表を7回(うち国際学会2回、招待講演1回)行い、研究論文7本(うち日本語論文4本、フランス語論文3本)を発表することができた。この分野は様々な領域が重なる学際的研究となるため、先行研究の数も限られている。そういった領域で今後の研究に繋がる多くの業績を残すことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore the relationship between the generation of the norms and and literature. We Mainly focused on a French 19th century poet-critic Baudelaire and tried to elucidate his works through his formative years in college. We also focused upon the reception of Baudelaire's work and the generation of the norms.

During the four years of the term of this office, we gave oral presentations in academic conferences 7 times (twice in international conferences and once as an invited lecture). We also published seven research paper(4 Japanese paper and 3 French paper). This field of research demands interdisciplinary work and for this reason, the number of previous studies is limited. We were able to leave important works that leads to the future of research.

研究分野：フランス文学

キーワード：ボードレール 中等教育

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、約6年間の調査と研究の成果として、2010年に『ボードレールの学校教育 (La Formation scolaire de Baudelaire)』という博士論文をパリ第四・ソルボンヌ大学へ提出した。この論文は、フランス19世紀の中等教育を受けた詩人・批評家シャルル・ボードレール(1821-1867)を具体例として、フランス中等教育の歴史、組織、内容を多岐にわたる資料から調査したものであった。中等教育の歴史や組織に関する先行研究はあるものの、中等教育の内容を具体的に掘り下げた研究がほとんどなかったため、博士論文の執筆にあたって、フランス国立古文書館に保存されていた学監や教員の報告書、褒賞された生徒の答案からはじまり、当時の教科書、新聞、諷刺画、雑誌、小説、日記などさまざまな証言、および関係する研究書など1300点を超える資料や文献を参照した。

この中には今まであまり顧みられてこなかった貴重な資料もあったが、それぞれの内容および範囲が多岐にわたり、博士論文執筆時には集まった参考文献を十全に活用することができなかった。当時の学校教育は、時の政治体制のみならず、教会権力、経済、社会通念など、様々な要素と深い関係をもっていた。そして教権の要望、教員の研究成果や自発的な使命感、関係省庁からの要請、または商業的な理由から様々な教科書が執筆され、規範として使用されていた。博士論文の中では、このような規範の生成については簡単にしか触れることができず、調査の余地が残された。さらに最も大きな問題点として、規範として教えられた文学テキストと19世紀のロマン派以降に誕生した新しい文学との関係性について、博士論文では触れることができなかった。

このように博士論文では、時間と紙幅の都合上、関係する資料が集まりながらも、十分に研究を掘り下げることができなかった領域が残されていた。このような背景のもと、さらに広範な文献を集めつつ、博士論文で得た成果をより広げ、発展させることが本研究の狙いであった。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、主に二つあった。一点目が、文学テキストが規範として生成されるメカニズムを多面的に捉えること、二点目は、規範とされた文学テキストがどのように受容され、新しい文学作品が作られたか検証することであった。この際、前者に関しては19世紀のフランスという時代に縛られず、広範な時代(17世紀~現代)と場所(ヨーロッパ、日本)を想定することによって、異なった社会状況において、文学テキストがどのようにして規範とみなされ、認知されていく

のか、またそこにはどのような要請が働いていたのか検討することが目的となった。

規範と文学作品の関係については、博士論文での研究をより発展させるために、ボードレールの作品を中心に扱うことにした。一般的には規範に対して反旗を翻したロマン派の系譜、そして新しい詩学を打ち立てた象徴派の祖として認められているボードレールだが、その詩の中には古典の要素が多々鏤められている。古典詩人ボードレールという像は既に語られているが、学校で教えられる教育内容とボードレールの詩学の関係を検討した研究はまだない。ボードレールの作品内にある古典的要素を細かく検討することで、学校教育と文学生成の関係を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

規範の生成(教科書や詩法)に関しては、文献渉猟と既に確認済みの資料をまとめることが重要な作業となった。日本では閲覧できない文献が多いため、フランスの国立古文書館やフランス国立図書館にて調査をするのに多くの時間を用いることになった。

ボードレールが19世紀末にフランスの文壇で注目されるようになると、それが欧州へ波及し日本へも輸入されてくる。日本でボードレールがどのように受容され、規範化されたか探るために、明治以降、日本文学の近代化の中でボードレールが占めた位置を再検証した。さらに日本のアカデミズム発展においてボードレールの作品が果たした役割も調査することになった。その際、当時の文芸雑誌や翻訳書、さらには辞書類などを調査し、大学教育に関係する社会状況なども考察する必要があった。日本のアカデミズムがどのようにして文学を研究対象として認めるようになったか調べるために、大学関係者の出版する学芸誌を調査した。そのため、社会的、比較文学、文献学的研究領域を横断する研究方法をとることになった。

同時進行的に文学研究として、ボードレールの作品を再精読しつつ、その内容、形式、修辞、詩法など、古典教育と関連があると思われるところをリストアップする作業が必要となった。これも内容や質が多様であるため、ある程度分類をしながら進めることになった。研究の対象とするべき作品を絞り込み、調査を重ねることで、精査をしながらボードレールの古典的要素を改めて発掘する狙いがあった。

このように研究の方法としては第一に多角的かつ横断的な資料収集を行い、次にその精査をしつつ、学際的な研究発表や論文にまとめる作業が行われた。

4. 研究成果

文学テキストが規範化される過程を探るには、広範かつ複層的な調査が要求されるため、資料収集に多くの時間を要することになった。まずは、クルツィウス及び、ヴォルピアック＝オージェらが記した著作、論文を参考にしながら教育に関する基本的な情報、そして具体的には *Ad usum Delphini* 叢書と *Ad usum scholarum* 叢書を整理してまとめることができた。フランスにおける文学の規範化の動きは政治体制の中央集権化と重なる点が多く、文学は政治的な問題と不可分であったことが理解された。この分野に関する研究は未着手な領域が多く、一研究者のライフワークに相当する膨大な範囲が対象となる。そのため、これからも少しずつ文献の精査を進めていき、今後の研究の礎石をつくることを目指す。この分野において指針となる基本的な研究調査ができたことは大きな成果である。

ボードレールと規範文学に関しては、博士論文の内容を整理して、19世紀の中等教育の内容を可能な限り具体的に再現した論文を研究誌 *L'Année Baudelaire* に公表することができた。この論文では、当時の政治状況なども踏まえた上で、国立古文書館に保存されている資料のみならず、当時の新聞記事、文学作品、証言、そして様々な教科書を元にした緻密な調査がなされた。ボードレールが受けた授業の時間割、教育の内容と方法、そして使用された教科書を推定し、教師の経歴や評価なども調査し、古典教育の実態とその重要性を明らかにすることができた。国際的にボードレール研究の牽引役となっている研究誌に、中等教育の重要性を再認識させる論文を発表することによって、未開拓などころの多い研究領域に一石を投じることができたのは大きな成果である。

この論文に先立ち、2011年9月には *L'Histoire* 誌にボードレールがどのような学校生活を送り、どのようにして古典に対して反抗心、嫌悪感を抱くようになったかを論じる記事を発表することができた。1820年代からロマン派の詩人たちは伝統的な規範に反旗を翻し、ボードレールの世代はこの新しい文学に共感を示していた。ところが、学校内では旧来の古典教育が続けられていただけではなく、むしろ新しいロマン派の文学に反発してより保守的な反動教育が展開されたと言える。ロマン派の影響で保守化した古典教育に対して嫌悪感を抱き、反感を覚えたのがボードレールの世代であった。新しい文学は自由の象徴とされる一方、古典教育は教権や王権に依拠する保守主義の象徴とされた。学校教育は政治および宗教と密接な関係を持っており、そもそも古典を教えるという選択が政治的な問題であったこと、文学者になるということも政治的な問題であったことを提示することができた。

本論は、古典教育の内容のみならず政治的

な意味にも焦点を当てることで、文学教育の意味を問い直す契機となった。こういった古典教育の実態は、日本だけではなくフランスにおいても忘れられているため、幅広い読者層を持つ *L'Histoire* 誌に記事を掲載した反響は大きかった。

ここで扱った論をさらに発展させるため、ボードレールが1845年に美術批評家として文壇にデビューした背景も調査した。知識と教養の基盤となっていた古典教育、ロマン派の登場以降、規範をどこに求めるか混乱していた美術界、そしてジャーナリズムの発達による批評家・詩人の役割の変化という三つの点が絡み合っただけでなく、ボードレールは文壇にデビューすることになった。このことを2014年12月に岩手大学で開催された国際シンポジウムにて発表することができた。

2012年6月3日、東京大学で開催された日本フランス語フランス文学会の春季大会にて「レトリック教育史研究と文学研究」というワークショップに発表者の一人として参加することができた。ここでは、ギリシア・ラテンから続くレトリック教育をイエズス会が古典教育に吸収し、それをフランス19世紀の中等教育が継承していることに着目した。教育の基盤にレトリック教育があり、時代によってその現れ方や教え方は異なっているが、教科書や教育理念などを細かく検証すると、その根底には常にレトリック教育があることが明らかになった。1789年以降の革命は、政治体制を大きく変革させたが、教育には断絶をもたらすことはなかった。19世紀の中等教育を受けた人たちにとって何が一般教養として共有されており、何が新奇なものとして捉えられたか理解するためには、古典教育、特にレトリック教育の内容を知っておく重要性が再確認された。

第三共和政以後は、古典語の優位が覆り、文学史という新しい学科の誕生によって、学校教育では古典文学を再生産するのではなく、文学について書くことが主な作業となる。このことが、伝統的レトリック教育に大きな変革をもたらされたが、文学史が求めた作文の根底にはレトリック教育が形を変えながらも継承されていることも理解された。

19世紀の学校教育では古典語、特にラテン語が非常に重要な地位を占めており、ラテン語による作文や詩作が実践されていた。ボードレールはラテン詩で秀でた才能を発揮し、権威とされたコンクール・ジェネラルにて表彰もされている。当時のラテン詩の試験では、散文のラテン語が題として与えられ、その散文をラテン詩法に則った美しい韻文にする技術が競われていた。しかし、誰によってどのような基準の元で順位が決められていたか検証した研究はなかった。つまり、ラテン詩の授業を受けていたことは良く知られていても、その授業を通してどのような学習成果が得られていたか、またはどのような目的

があったかまだ明確には理解されていない面があった。

そこでまず、規範の生成に大きな役割を担ったと思われるコンクール・ジェネラルの審査員を調べ、そしてその教員がどのような経歴の持ち主か調査した。また、フランス国立古文書館には、ボードレールの答案だけではなく、同じラテン詩の試験を受けて褒賞には及ばなかったものの次点だった生徒の答案も数枚保存されている。これらの生徒の答案と、一等の生徒の答案および二等だったボードレールの答案を比較することで、ラテン詩法のどのような点を実際に生徒たちが習得していたか、そしてどのようなところが評価されたか検討する段階まで研究を進めることができた。これからボードレール以外の答案を数多く検討し、より精度の高い調査を重ねてからこの成果を論文として発表する予定である。

ボードレールの具体的な作品と学校教育を考える上で、ラテン詩法は重要な役割を担っている。ラテン詩法は学校教育で規範として教えられていたが、17世紀にボワローによってある程度規範化されたフランス詩法は、保守的な古典教育の中では危険な遊びとみなされ、公には教えられることはなかった。特にロマン派の台頭以降は、フランス語の詩作および褒賞は禁止された。教権が強く、フランス語は神聖なラテン語よりも下位にある俗語としてみなされていたこともその理由の一つであった。また、フランス詩法そのものも、音綴数や韻なども含めた言葉の厳密な用法に関しては曖昧な点が見受けられた。19世紀に至ってなお、ラテン語と同じ長短アクセントをフランス詩法に適応しようという試みさえ存在した。フランス詩法は19世紀になってなお揺れている面があった。

一方19世紀にルイ・キシュラル、ジュール・デシオーによるフランス詩法に関する本やフランス語版の詩法辞典『グラデュス』が刊行されるなど、改めてフランス詩法の整理や規範化の動きがあった。フランスの詩には、当然フランス語独自の詩法があったが、ラテン語のようにフランス語を書くこと、そしてラテン詩を中心に学んだ世代にとって、フランス語とラテン語を完全に切り離して考えていたか疑問の余地が残る。実際、サミナディエ＝ペランはラテン詩人としてのボードレールに着目し、ボードレールのフランス語の裏に透けて見えるラテン語を明らかにした重要な論文を記している。

そこで、19世紀のフランス詩法の規範化の流れの中で、キシュラル、デシオー、テニンおよびテオドール・ド・バンヴィルの記したフランス詩法を参考にして当時のフランス詩法のあり方を調査する一方で、ラテン詩法の影響も考慮する必要があった。これはフランス語の背後にラテン語を読み取る習慣を植え付けた学校教育の影響を探ることもあった。

古典教育がどのようにボードレールの詩に影響を与えた検討するために、具体例として「吸血鬼の変身」という詩を検討した。この詩は以前からラシーヌの『アタリー』の一節と構成・内容が類似していることが指摘されており、ラシーヌの作品は学校で学んだことは推測されていたが、その具体的な論拠は示されずにいた。そこで、当時一般的に使用されていた有名な教科書に問題の部分が掲載されていることを確認し、さまざまな証言を元にしてこの一節が一般的に読まれていたことを明らかにすることができた。またボードレールの教師が前任校で『アタリー』を読ませていたことを示す書類を国立古文書館にて発見し、ボードレールが問題の一節を授業で暗唱した可能性が限りなく高いことを証明した。『アタリー』の一節は、古典教育の中でも最も有名で当時の人口に膾炙していたことを明らかにすることができた。

さらに、ラシーヌの作品とボードレールの詩の類似性はその構成にとどまらず、活写法(hypotypose)と呼ばれる修辞法にみられることに注目した。詩を朗誦することによって、ある情景が眼前で繰り広げられている印象を与えることが重要であり、そのためには直接話法、知覚動詞、現在形が利用されていることをラシーヌとボードレールの両方のテキストで確認した。

ボードレールはラシーヌの作品と同じ構成を用いるだけではなく、活写法で女性を描くことによってその詩に古典的な装いを与えつつも、娼婦と思しき女性と関係を持った後の倦怠を描き、詩には適さない卑俗な語を用いることで、当時の読者の眉を顰めることになった。その結果「吸血鬼の変身」は1857年の裁判の結果、公衆道徳紊乱の罪で削除が命ぜられた。ボードレールは、構成や修辞法においては古典の規範を利用しながら、娼婦との肉欲を描くことで、ラシーヌの宗教悲劇をパロディ化していた。このパロディをボードレールは当時の読者が読み取ることを多少とも期待していたと想定できた。

こうして宗教的な主題を卑猥なものに置き換えることで、古典的な装いさえも一種の皮肉に思わせるボードレールの狙いがあったことを明らかにすることができた。この論は2014年に「Réexaminer Baudelaire et le songe d'Athalie」という題でボルドー大学出版が発行している *Modernité* という学術誌に掲載された。

文学作品が規範として生成される特殊な事情を探るために、日本におけるボードレール受容も研究対象とした。明治以降、日本では社会全体の近代化が喫緊の課題となっており、この近代化の波は、軍備などを含めた工業、生糸などの産業はもとより、行政、司法、経済、貿易、教育、医学のみならず、文学にまで及ぶ。西欧文学が日本に入ってくることによって、自らの文学が相対化され、問

い直さることになった。その結果、西洋詩の翻訳という手段を利用して、明治の詩を作ることを目指した記念碑的な『新詩体抄』が1882年に刊行された。西欧文学に対する憧憬、欧米に対して遅れをとっているという焦り、アイデンティティの確立、詩形も概念も新しい詩の探究など、文学の近代化の背景には様々な要請が働いていた。一方では大学内で教えられ、研究の対象となっていくことによって一部の文学テキストが規範化されていき、一方では翻訳という作業を通して、新しい詩を模索する詩人たちの運動の中で欧米の詩は受容されていくことになった。詩といえば漢詩、歌といえば和歌が主流だった日本において、西欧文学は伝統や固定観念から解放をもたらし、新体詩、口語詩、散文詩、自由詩など新しい文学をつくる契機を与えることになった。

19世紀末、西欧で象徴主義の運動が隆盛期を迎えていた時に、それが日本にも輸入されてくる。当時の西欧の詩人や批評家たちの多くがボードレールを先駆者として認めていたことによって、日本においてボードレールは当初から重要な地位を占めることになった。アカデミズムでは詩の中に現れている象徴を読み解く作業が古来の文献学的な研究方法と重なり発展していく。そのことは、2011年にパリ第四・ソルボンヌ大学にて、世界中のボードレール研究者を招待して開催された国際学会にて発表し、翌年『桜文論叢』に論文で公表し、研究成果を示すことができた。

文壇では、漢詩でもなく和歌でもない詩を支える理論として象徴主義が移入され、新しい文学が希求されていたことを再確認した。そして、その中で山村暮鳥と大手拓次がどのようにボードレールを受容し、自らの作品に反映させていたか調査することができた。新しい文学運動に与した作家や詩人たちにとってボードレールは一種の偶像と化していたが、山村暮鳥はじめ、多くの詩人たちは英訳を読んでいた。例外的に大手拓次はフランス語の原文を読み、翻訳をするだけでなく、長期間にわたってボードレールを読み続け改訳をすることによって、新しい文体と表現方法を体得していった。この研究の成果は、群馬県立土屋文明記念文学館における講演、同文学館の紀要『風』に掲載された論文「日本におけるボードレール受容—文壇編：山村暮鳥と大手拓次のボードレール訳について」にて公表することができた。

以上、4年で規範と文学の関係をめぐって多様かつ専門的な研究の成果（学会発表等6回、論文7本）を公表することができた。それらはフランスをはじめとする国際学会の場のみならず、日本の研究界にも寄与する成果となった。またフランスにおける規範文学の生成、ラテン詩法とフランス詩法の関係など今後更なる発展に繋がる研究をまとめる

ことができた。この4年の研究成果を受けて、今後も同領域で成果を出すことができるであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 畠山達「日本におけるボードレール受容—文壇編：山村暮鳥と大手拓次のボードレール訳について」『風』群馬県立土屋文明記念文学館紀要、18号、2015年、pp. 1-20.

② Toru HATAKEYAMA, « Réexaminer Baudelaire et le songe d'Athalie », *Modernité*, Presses universitaires de Bordeaux, 査読有、n° 37, 2014, pp. 81-94.

③ 畠山達「ボードレールの「吸血鬼の変身」におけるレトリック」『桜文論叢』日本大学法学部桜文論叢編集委員会、査読有、85号、2013年、pp. 111-133.

④ 畠山達「日本のボードレール受容—アカデミズムにおける地位の確立まで」『桜文論叢』日本大学法学部桜文論叢編集委員会、査読有、83号、2012年、pp. 73-96.

⑤ Toru HATAKEYAMA, « La formation scolaire de Baudelaire », *L'Année Baudelaire*, Honoré Champion, 査読有、n° 13/14, 2011, pp. 225-246.

⑥ Toru HATAKEYAMA, « Pourquoi Baudelaire détestait l'école », *L'Histoire*, Sophia Publications, n° 367, 2011, pp. 70-74.

⑦ 畠山達「ボードレールの散文詩：「完璧な素描」としての試み—韻文と散文の関係をめぐって—」『日本フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、査読有、99号、pp. 163-178.

〔学会発表〕（計 6 件）

① 畠山達「日本におけるボードレール受容—山村暮鳥、大手拓次にも触れながら」群馬県立土屋文明記念館特別講演、2015年1月25日、群馬県立土屋文明記念館。

② 畠山達「どのようにして詩人になるか：ボードレールの場合」、国際シンポジウム「無名な書き手のエクリチュール」、2014年12月21日、岩手大学。

③ Toru HATAKEYAMA, « Baudelaire: qu'as-t-il

fait de son enseignement secondaire ? », Transmission et transgression des formes poétiques régulières, 2013 年 9 月 7 日、中央大学。

④ 島山達「19 世紀の中等教育と文学—ボードレールを中心に」人文社会系若手セミナー、2012 年 7 月 15 日、日仏会館。

⑤ 島山達、月村辰夫、横山裕人「レトリック教育史研究と文学研究」日本フランス語フランス文学会春季大会ワークショップ、2012 年 6 月 3 日、東京大学。

⑥ Toru HATAKEYAMA, « Baudelaire dans le monde académique au Japon », Baudelaire dans le monde, Traditions critiques et traductions, 2011 年 12 月 9 日、パリ第四・ソルボンヌ大学、パリ（フランス）。

〔図書〕

なし

〔産業財産権〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島山 達 (HATAKEYAMA, Toru)

日本大学・法学部・准教授

研究者番号：10600752